医療系大学生による東日本大震災被災地支援活動
―2015年12月の活動の報告と，学生の体験についての検討―

藤澤美穂[1)]，氏家真梨子[2)]，畠山秀樹[2)]，髙橋智幸[3)]，相澤文恵[1)]

Support activities for affected areas by medical university students:
report on activities in December 2015 and examination of student's experience.

Miho FUJISAWA, Mariko UJIIE, Hideki HATAKEYAMA, Tomoyuki TAKAHASHI
and Fumie AIZAWA

キーワード：　医療系大学生，臨床心理学的地域援助，東日本大震災津波，レジリエンス，自己効力感
Key Words：medical university students, clinical psychological community support, Great East Japan Earthquake and Tsunami, resilience, self-efficacy

[1)] 岩手医科大学教養教育センター人間科学科心理学・行動科学分野
[2)] 岩手医科大学健康管理センター
[3)] 仙台市宮城総合支所保健福祉課

Ⅰ．はじめに

2011年の東日本大震災津波以降も、日本各地において自然災害が発生している。2016年4月には熊本地震が発生し、九州地方を中心に大きな被害をもたらした。また岩手県内においても、2016年8月には台風10号が沿岸地域を襲い、岩泉町や宮古市、久慈市等での甚大な被害を記録した。被災地は新たな災害に見舞われたのである。

このように我々は、自然災害と無縁ではいられない。東日本大震災の被災地である岩手では特に、災害復興は進行中の課題でもあり、災害とその被害に遭った人々への関わりが、なおも必要とされている。

我々は昨年、本学学生による被災沿岸部での支援活動について報告した（藤澤他,2015）。本稿においては、前稿から約半年後におこなわれたイベントに参加した学生の活動を概観する。そしてこの体験が学生にどのように感じられたのかについて、レジリエンスと自己効力感の観点から検討する。さらに支援活動への参加による教育効果について考察する。

Ⅱ．今回学生が参加した支援活動の概要

1．学生が関与した被災地支援活動の位置づけ

今回学生が関与した支援活動は、岩手県臨床心理士会により2011年より継続されている、宮古市田老「グリーンピア三陸みやこ」内の仮設住宅地域における支援活動の一環でおこなわれたイベントである。岩手県臨床心理士会の被災地支援活動については藤澤(川口)・山口,2012、藤澤,2013、岩手県臨床心理士会,2015、同,2016に詳しいが、2015年はサロンとその中でのリラクセーションプログラムの実施、そして季節に応じたイベント開催を、月1回程度、毎回2-3名の臨床心理士のチームによる活動が継続されていた。

2．第1回「田老ふれあいライブ」の開催（藤澤他,2015）

田老ふれあいライブ実行委員会企画による音楽イベント「田老ふれあいライブ」（以下イベントと記載）は、

2014年中旬より準備が開始された。第一筆者がその企画にかかわっていた経緯から、本学の「吹奏楽サークル」と「からあげ同好会」に声をかけ、2015年5月より、両団体も実行委員会に参画した。

第一筆者による事前レクチャーと学生間の打ち合わせ会を経て、2015年5月31日（日）、岩手県宮古市田老地区「グリーンピア三陸みやこ」内のふれあい交流館において第1回「田老ふれあいライブ」が実施された。学生はグリーンピア内仮設住宅全戸へのチラシ配布によるイベントの広報周知、からあげの準備と提供、ドリンクの提供と来場者との交流、そして吹奏楽演奏をおこなった。イベント時間中には100名超が来場し、15時に終了した。

３．今回の第2回「田老ふれあいライブ」について

第1回イベントに参加した学生および吹奏楽サークルからの希望等から、2015年12月20日に第2回田老ふれあいライブを開催することとなった。今回の会場については、「グリーンピア三陸みやこ」敷地内で、仮設住民の生活のサポートと居場所の運営をしている「田老サポートセンター」を借りることとなり、同センターと相談をしながら準備と運営にあたった。

また第一筆者の担当する医学部1年「初年次ゼミ」の所属学生と、学内の伝統ある団体「衛生検査部」からも、イベント参加の希望が寄せられ、３団体合同での活動をおこなうこととなった。また活動の記録については、写真部からの協力者が同行し、撮影することとなった。

４．イベント当日までの準備

参加学生は全員、被災地活動に関するボランティア保険に加入し、活動の安全をはかった。そして当日までの間、吹奏楽サークル部員は演奏曲目を決定し、練習に励んだ。衛生検査部は岩手県臨床心理士会と相談をもちながら、当日提供するフード（豚汁）を決定、衛生面への配慮を徹底しながら、準備に取り組んだ。またビンゴゲームの景品の選定をおこなった。心理学ゼミでは、「宮古市田老地区の被災状況と今後の復興計画について」「学生による災害ボランティア活動について」「東日本大震災での医師による支援活動：2011年3月中」「同支援活動2011年4月～9月まで」「同支援活動2011年9月～現在まで」について調べ、ゼミ内で発表をし、当日に備えた。

また参加学生を対象とした事前レクチャーを2015年11月26日の放課後にもった。ここでは事前アンケート調査の実施の後、今回のイベント内容の説明と被災地での活動にあたっての諸注意、臨床心理学的地域援助に関する説明、トラウマティックストレスに関する心理教育を第一筆者よりおこなった。その後学生間の打ち合わせの時間を取った。

５．イベント当日

2015年12月20日（日）、岩手県宮古市田老地区「グリーンピア三陸みやこ」敷地内の田老サポートセンターにおいて、第2回「田老ふれあいライブ」を開催した。学生の現地までの移動手段・費用は、吹奏楽サークルが受けた助成金（住友商事　東日本再生ユース・チャレンジ・プログラム－活動・助成研究－2015年度）を貸切バスの料金に充てた。第一筆者とは現地にて合流した。合計27名の学生が参加した。

表１　第２回田老ふれあいライブに参加した学生の内訳

	吹奏楽サークル	衛生検査部	心理学ゼミ	写真部
医学部	３年:１人 ２年:１人	３年:１人 ２年:４人 １年:２人	１年:５人	
歯学部	１年:１人	１年:２人		
薬学部	３年:２人 ２年:２人 １年:２人	１年:３人		３年:１人

当日の学生の動きとイベントの内容を、表2に記す。

表 2　学生の動きと、第 2 回田老ふれあいライブ内容

12 月 20 日（日） 7:00	吹奏楽サークル：琢誠館集合、他の学生も 7:15 に矢巾キャンパス正面玄関に集合、バス出発
9:50	宮古市田老の田老サポートセンター到着 吹奏楽サークル：会場設営、リハーサル、曲目リーフレット配布 衛生検査部料理班：豚汁の準備 衛生検査部チラシ班・心理学ゼミ：仮設住宅各戸へのチラシ配布、呼びかけ 写真部：各準備についての撮影
11:30	全体ミーティング 手が空き次第昼食
12:00	フードの提供（衛生検査部の豚汁と、岩手県臨床心理士会の炊き込みご飯・玉こんにゃく、田老サポートセンターのお漬物）
13:00 ライブ開始	オープニングアクト：オカリナ演奏（岩手県臨床心理士会） 吹奏楽演奏：「ジブリメドレー」「ジングルベル」「川の流れのように」など 6 曲、ＭＣで楽器紹介、アンコール「銀河鉄道 999」
14:00	・ビンゴゲーム 学生：来場者との交流、ビンゴのサポート、景品提供、茶菓の提供等 ・田老の自治会・婦人会のみなさまによる踊りの披露
15:00　終了	後片付け、ミーティング 会場を出発
18:30	矢巾キャンパス到着、解散

イベントの様子の写真を抜粋して紹介する。写真撮影および報告等における公開については、イベント時に説明し、了承を得ている。

Ⅲ．イベント後のアンケート調査の分析

本研究では、第2回田老ふれあいライブ終了後に実施したアンケート調査の内容を分析した。

1．調査目的

東日本大震災津波の被災地での支援活動への参加が、医療系大学生にどのように体験されたか、検討する。

2．調査方法と対象

本イベントは東日本大震災津波から4年9ヶ月後に実施されたものである。イベント参加学生のうち、調査協力への意向を示した学生を対象としたアンケート調査を実施した。調査は計2回実施され、1回目は11月26日の事前レクチャー集合時、2回目はイベント終了後で、回答期間を5日間設定した。イベント参加学生27名のうち、1回目調査の提出者は20名（回答率83.3%）、2回目調査の提出者は24名（回答率88.9%）であった。

3．調査内容

1回目調査においては、学部、学年、氏名、性別、年齢、東日本大震災津波発災時の居所などの基本情報の記載と、藤澤他（2015）の分析結果に基づき作成した質問項目について、「まったくあてまらない」～「よくあてはまる」の5件法で回答を求めた。質問項目は以下の7項目である：Q1:被災した方やその地域に役に立ちたい、Q2:被災した方に元気を出して欲しい、Q3:被災した方にうまく接することができるか不安だ、Q4:現地に行くのは、緊張する、Q5:現地で災害が起こらないか、心配だ、Q6:被災地のことは、ひとごととは思えない、Q7:自分の目で現状を見たい。そして「被災地での活動に関わることについての、あなたの考えを教えて下さい」の質問項目への自由記述回答を求めた。

2回目調査では、上記と同様の7項目への回答を求めたほか、自由記述3問（ふりかえり1、2、3）と、質問紙への回答を求めた。

ふりかえり１：今回の「田老ふれあいライブ」に参加した感想を教えて下さい。

ふりかえり２：被災地（岩手県宮古市田老）の仮設住宅地域に実際に出かけてみて、感じたことや考えたことなど、教えて下さい。

ふりかえり３：「田老ふれあいライブ」を経たいま現在（2015年12月）、被災地への自分の関わりについてのあなたの考えや、今後してみたいことなどあれば、教えて下さい。

・二次元レジリエンス尺度:BRS

レジリエンスとは、精神的な回復力を意味し、ストレスフルな出来事や状況の中でも潰れることなく適応し、また精神的な傷つきから立ち直ることはできる個人の力を指す（平野、2015）。本研究では、支援活動に伴う各種ストレスの影響から回復し、体験をポジティブにとらえ、活かすことができる要因としてレジリエンスを位置づけることとした。レジリエンスの測定に用いたBRS尺度は平野（2010）により作成され、資質的レジリエンス要因と獲得的レジリエンス要因の2下位尺度、計21問の質問項目（例：どんなことでも、たいていなんとかなりそうな気がする）から構成され、「まったくあてはまらない」～「よくあてはまる」の5件法で回答を求めた。

・日本語版外傷後成長尺度：PTGI-J（宅，2010）

外傷性成長（post traumatic growth）は、トラウマティックストレスを体験した人の中に生じるポジティブな変容を意味する概念である(Tedeschi&Calhoun,1996)。本研究では、被災地に出向き被災者の話を聞くことで生じる、被災体験への間接的な接近を二次的外傷体験ととらえ、その結果生じた変化をはかるため、本尺度を用いることとした。計21問の質問項目（例：人生において、何が重要かについての優先順位を変えた）で構成され、「まったく経験しなかった」～「かなり強く経験した」の6件法での回答を求めた。

・K6日本語版（Kessler et al.2002;古川ら,2003）

気分・不安障害のスクリーニングを目的に開発された尺度であるが、本研究においてはメンタルヘルスの

状態を把握する目的で、本尺度を用いた。「神経過敏に感じましたか」「絶望的だと感じましたか」などの計6問の質問項目に対し、過去30日の間にどれくらいの頻度であったかを、「まったくない」～「いつも」の5件法で回答を求めた。

・一般性セルフ・エフィカシー尺度：GSES（坂野他，1986，坂野他，2006）

自己効力感self-efficacyはBanduraによって提唱された概念で、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまくおこなうことができるかという個人の確信を意味し（バンデューラ，重久訳，1985）、行動を起こそうとするときに、その行動を「できそう」と判断する先行要因として理解される（相澤他，2015）。本研究においては、自己効力感を将来の行動変容の予測因子として理解することとした。GSESでは「何か仕事をするときは、自信を持ってやるほうである」などの計16問の質問項目に対し、「はい」―「いいえ」の2件法で回答を求めた。

4．分析方法

対象者ごとにBRS総得点を算出、全体の平均値を基準に「レジリエンス高群」「レジリエンス低群」に分け、統計的分析をおこなった。また同じくGSES総得点を算出、全体の平均値を基準に「GSES高群」「GSES低群」にわけ、分析をおこなった。分析にはIBM SPSS Statistics ver.22 を用いた。

自由記述での活動のふりかえり内容について、研究者1名がふりかえり項目ごとに一覧表へと入力した。その後研究者2名による一次分析として、一覧表に基づき、ふりかえり項目ごとでの重要アイテムの抽出をおこない、二次分析として、アイテム同士の関連を検討し、重要カテゴリーとして名称をつけ、整理をおこなった。これらの分析作業においては、重複する内容は1アイテムにまとめたが、極端な抽象化はおこなわず、文意を損なわない範囲にとどめた。さらに、レジリエンス高群・低群に分けて、重要アイテムの内容に差がないかを検討した。

また、自由記述のふりかえり内容を、自己効力感の観点から検討をおこなった。これについては研究者1名による一次分析の後、研究者2名によって内容の検討をおこなった。

5．倫理的配慮

対象者には、調査の趣旨について、調査への協力と同意の撤回が自由にできること、データ分析にあたっては個人が特定できないようにする等プライバシーの確保をはかること、データ保管は個人情報の保護を厳重におこなうこと、得られた結果は学術成果物として発表すること等について、書面で説明した上で、同意書により調査協力の同意を得た。

Ⅳ．結果

1．回答者の特徴

回答者の性別は男性11名、女性15名であり、平均年齢は20.85歳（SD1.79、18歳～25歳）、岩手医科大学に在学する学生である。東日本大震災津波発災時の居所は、被災三県にいた者は11名であった。うち6名の学生が、第1回田老ふれあいライブから引き続き参加していた。

表３　対象者の基本属性

男女比	男性 11 名、女性 15 名	
平均年齢	20.85 歳(SD1.79)	
発災時の居所	岩手宮城福島の被災三県	11 名
	青森秋田山形の東北地方	3 名
	関東地方	6 名
	その他の地域	6 名

２．量的分析

１）支援活動にあたっての意欲、感情、意志等：活動前後の比較（有効回答N=18）

活動前後で実施した質問項目7問について、対応のあるt検定で比較をしたところ、有意差は確認されなかった。

２）震災時の居所―被災三県とそれ以外でみた、支援活動にあたっての意欲、感情、意志等の活動前後の比較（有効回答N=18）

上記と同様の質問項目7問について、被災三県群（N=6）と被災地外群(N=12)で、各群内において活動前後の回答を対応のあるt検定で比較をしたところ、有意差は確認されなかった（図１）。

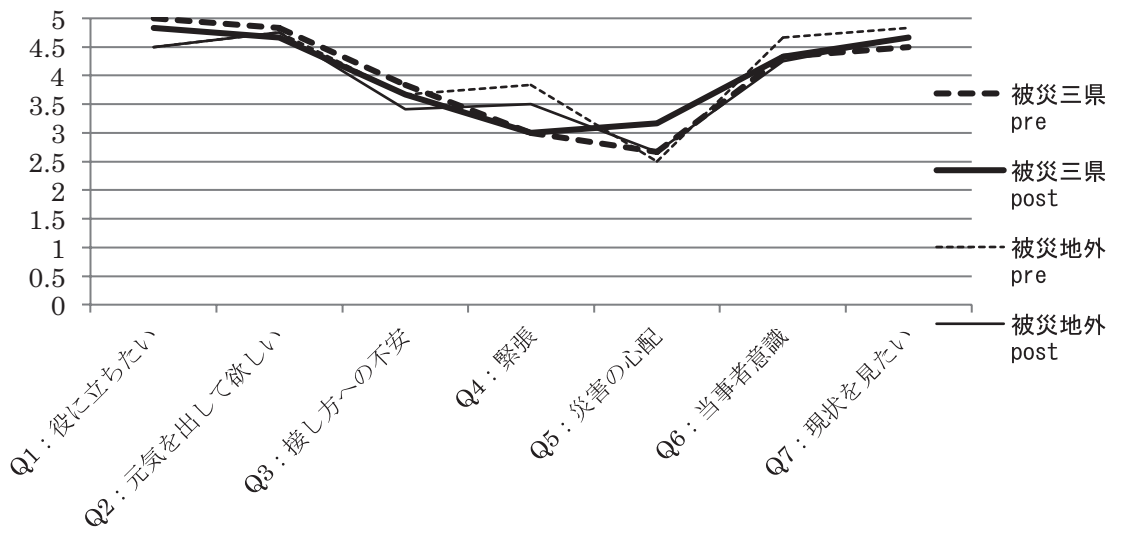

図１　震災時の居所–被災三県とそれ以外でみた、支援活動にあたっての意欲、感情、意志等の活動前後の比較

３）レジリエンス

BRS総得点（得点範囲21点～ 105点）について、有効回答24名におけるBRS総得点の平均は67.85(SD±11.78)であった。以下、平均値を基準にレジリエンス高群・低群に分け分析した。

(1)　レジリエンス高低別でみた、支援活動にあたっての意欲、感情、意志等の活動前後の比較（有効回答N=18）

レジリエンス高群(N=13)内において、各項目の活動前後の回答について、対応のあるt検定で比較したところ、有意差は確認されなかった。レジリエンス低群(N=5) 内においても同様の分析方法にて比較したが、有意差はなかった。

(2)　レジリエンスと自己効力感の関連（有効回答N=24）

BRS総得点とGSES総得点について相関分析をおこなった。Pearsonの相関係数を用いて分析したところ、r=0.76(p<.01)となり、有意な正の相関を示した。

(3)　レジリエンスと外傷性成長の関連（有効回答N=24）

BRS総得点とPTGI-J総得点についてPearsonの相関係数を用いて分析したところ、r=0.38(p<.1)となり、有意な相関は確認されなかった。

(4)　レジリエンス高低別でみた、各尺度の比較

表 4　レジリエンス高群・低群における各尺度の得点と、2 群間の比較

	人数	BRS			GSES				PTGI-J	K6
		BRS	資質的要因	獲得的要因	GSES	s:行動の積極性	s:失敗に対する不安＊逆転	s:能力の社会的位置づけ		
レジリエンス高	15	79.93	46.13	33.80	8.13	3.27	2.53	2.33	66.60	5.93
レジリエンス低	9	62.78	34.89	27.89	4.11	1.33	1.44	1.33	62.22	6.00

t検定による比較

t 値	5.554	3.166	2.749	2.555	1.714	2.054	0.601	−0.029
有意確率(両側)	p<.01	p<.01	p<.05	p<.05	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

レジリエンス高･低の両群間における各尺度得点の平均値の差をt検定により検討した。結果を表4に示す。BRS尺度の下位尺度である「資質的レジリエンス要因」と「獲得的レジリエンス要因」、そして自己効力感の指標として用いたGSES尺度総得点と、GSESの下位尺度「行動の積極性」において、レジリエンス高群のほうが低群よりも有意に高い結果となった。

4）震災時の居所について；被災三県とそれ以外でみた、各尺度の比較

表 5　被災三県群・被災地外群における各尺度の得点と、2 群間の比較

	人数	BRS			GSES				PTGI-J	K6
		BRS	資質的要因	獲得的要因	GSES	s:行動の積極性	s:失敗に対する不安＊逆転	s:能力の社会的位置づけ		
被災三県	9	67.33	38.78	28.56	4.22	1.44	1.33	1.44	66.00	8.56
被災地外	15	77.20	43.80	33.40	8.07	3.20	2.60	2.27	64.33	4.40

t検定による比較

t 値	−2.082	−1.548	−2.420	−2.291	−2.123	−2.042	−1.639	0.227	1.950
有意確率(両側)	p<.05	n.s.	p<.05	p<0.5	p<.05	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

被災三県群・被災地外群の両群間における各尺度得点の平均値の差をt検定により検討した。結果を表5に示す。BRS総得点、BRS尺度の下位尺度である「獲得的レジリエンス要因」、そして自己効力感の指標として用いたGSES尺度総得点と、GSESの下位尺度「行動の積極性」において、被災三県群のほうが被災地外群よりも有意に低い結果となった。

5）所属別にみた、各尺度の比較

表 6　所属別にみた各尺度の得点と、3 群間の比較

	人数	BRS	GSES	PTGI-J	K6
吹奏楽サークル	8	71.75	6.75	67.50	5.38
心理学ゼミ	4	78.00	7.50	60.00	4.75
衛生検査部	12	73.17	6.25	64.92	6.75

一元配置分散分析

F値	0.348	0.120	0.242	0.263
有意確率	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

吹奏楽サークル、心理学ゼミ、衛生検査部の３つの所属別に、各尺度の得点を比較した。結果を表6に示す。一元配置分散分析により検討したが、3群間に有意な差は見いだされなかった。

６）5月と12月の2回イベントに参加した者における比較

5月と12月の2回ともイベント参加した者の、レジリエンスおよび外傷性成長を、対応のあるt検定で確認した。有効回答4名について比較したところ、２時点での回答に有意差はみられなかった。

３．質的分析―レジリエンスの観点から

自由記述で語られた内容は、＜活動前の気持ち・考え＞、＜活動後の気持ち・考え＞の2領域に分類した。一次分析により141の重要アイテムが抽出された。そしてそれらを二次分析にて、重要アイテムを45に集約し、12の重要カテゴリーに分類した。＜活動前の気持ち・考え＞領域は活動前のアンケートへの記載から、＜活動後の気持ち・考え＞領域はふりかえり１、２、３の内容をまとめて検討し、カテゴリーに分類した。

結果について表7に示す。量的分析と同様レジリエンス高群低群における検討をおこなった。表中では、レジリエンス高群による回答は**ゴシック体**、レジリエンス低群による回答は**明朝体**、レジリエンス高低両群から得られた内容は**アンダーライン強調表記**にて記載した。

表７　活動前後の気持ち・考え

領域 (N=2)	重要アイテム (N=45)	重要カテゴリー (N=12)
活動前の 気持ち・考え	・大学に入ってはじめて東北の人々と触れてみて、みんな温かいなと感じ、何かをしてあげたい！と心から思うようになった ・**活動を通してお客さんを楽しませたい、役に立ちたい** ・**できることがあるならば、支援したい**	貢献したい思い
	・仮設住宅ということは、娯楽も少ないと思うし、ストレスが溜まると思う ・関東出身の何もわからない者が、気軽にボランティアなんてしてはいけないような気がしていた ・**現地の方々に失礼のないよう頑張りたい**	被災地への気遣い
	・ゼミで学んだことと実際の被災地の様子を確認したい ・**被災地の現状を知る**	被災地を知る
	・ボランティアに対する自分の気持ちの変化を、被災地での活動を通して，見ていきたい ・今後の自分の考えも改められたらと思う	自己変容の期待
	・3.11 で被災し、これからの自分に何ができるか、何をするべきなのかについて、考えさせられた ・自分がもらったものを少しでも返せる機会に参加できて良かった ・地元の状況を知りたい	当事者意識

活動後の 気持ち・考え	・名前を覚えてもらったのが嬉しかった ・孫のように話してくださった住民の方と交流し、地元の近所の高齢者を思い出し、会いたくなった ・自分が受けた支援を違う形ではあるけれど返すことができて、やっと自分のやりたかったことができたと思う **・たくさんの方が炊き出し、演奏会、ビンゴなど積極的に参加して下さり、また楽しそうにしてくれて良かった。成功して良かった** **・本当にたくさんの人が参加してくれて、盛り上がったので、私自身も楽しかった** **・とてもよい経験をさせていただいたと思う**	活動で得られた 満足感・充実感
	・大学で学んだことが、現場でより実感できた ・もっと傾聴を大事にしたい	理論と実践の つながりの実感
	・今回は演奏だけではなく、ビンゴゲームがあり、被災地の方々は前回よりも明るく楽しそうに、時間を過ごしているように感じた **・演奏は、前回の反省を活かして、みんなが知っている曲を演奏した結果、前回よりも来ているお客さんが楽しめているように感じた**	前回の活動との 違い
	・今回みたものを周りの人に伝えるなど、被災者側以外にも働きかけていきたい ・これから知識を蓄えて次の機会に活かせるように頑張りたい ・今回はお年寄りメインだったが子ども向けのコンサートなどもやってみたい **・今回の活動内容では反省すべき点も多々見られたため、次回以降の活動では改善して行きたいと思った** **・このような活動をすることで被災地の方に少しでも楽しんでもらえるのなら、これからも積極的に参加して行きたいと思う** **・自分たちの活動で被災地の方達を明るく元気づけてあげたい** **・他の地域にも行ってみたいと思う** **・もっともっと被災地に行く機会を増やして行きたいと思った** **・活動を通し自分の感情・態度に気づいた**	活動の反省と 意気込み
	・震災のショックを抱えていると感じられる人に会い、4年という時間が流れているが、過去のことではないということを改めて感じた ・行き帰りのバスの中で見た、広い土地の中に住居が点々としかないところを見て、津波がいかに恐ろしいかを知ることができたと思う **・住民同士でふれあいライブの話をして誘っていたことに、人々の横のつながりがあることを感じた** **・被災地の方々は、とても元気で、笑顔だった。辛いときがあったのに、たくましいなと思った** **・思った以上に悪い環境の中で過ごしており、気持ちが曇ってしまうようだと感じた** **・目には見えない震災の傷があるのだろうか** **・空き部屋となっているところが多く、ある程度生活再建が進んでいる世帯も増えていることがわかった**	被災地に抱いた イメージと現実
	・仮設住宅の地域の中に歯科医院があるのを見て、このような医療の提供の仕方もあるのだなと感じた ・医療人として、人として、もっと被災された方々と関わりっていきたい **・今回の活動を通して、今自分ができることをただやっているだけで喜んでくれる人もいると感じた**	
	・仮設商店らしいものも多く、もっと復興が進んでほしいと思った他、まだ募金や被災地支援が必要だと思った **・震災から4年以上たった今でも仮設住宅に暮らされていて、まだまだ支援の手が行き届いていないと感じた** **・仮設商店らしいものも多く、もっと復興が進んでほしいと思った他、まだ募金や被災地支援が必要だと思った**	復興への問題意識

以降においては、得られた重要アイテムを「」、重要カテゴリーを『』にて示す。

１）＜活動前の気持ち・考え＞の領域

活動前の気持ち･考えとして、参加者の約半数から「活動を通してお客さんを楽しませたい、役に立ちたい」「できることがあれば支援したい」と今回の活動を通して被災地への『貢献したい思い』が語られた。その一方で、「現地の方に失礼のないように」と『被災地への気遣い』が語られた。被災地以外の出身学生から、大学で始めて東北の人に触れることで抱いた東北への親近感から、『貢献したい思い』につながった語りと、その一方で何も分からない者が気軽にボランティアしてはいけないのではという『被災地への気遣い』の語りもみられた。

また、今回の活動の目的として『被災地を知る』が抽出され、「被災地の現状を知る」のみならず、「ゼミで学んだことと実際の被災地の様子を確認したい」という大学で学んだ知識と現状とのすり合わせの期待も語られた。さらに、この活動を通しての「自分の気持ちの変化を見たい」と『自己変容の期待』も語られた。

岩手県あるいは他県で被災した県の学生からは『当事者意識』として、実際に被災をしたことで「自分に何ができるか、何をするべきか考えさせられた」という意識や、今回の活動に参加することが「自分がもらったものを少しでも返せる機会」となっているという意識が語られた。

２）＜活動後の気持ち・考え＞の領域

回答者の大半から、「成功して良かった」「私自身も楽しかった」「とても良い経験をさせていただいた」という『活動で得られた満足感・充実感』が語られた。また、被災地出身の学生からは「自分が受けた支援を違う形で返すことができて」という語りが見られ。これは＜活動前の気持ち･考え＞の『当事者意識』の中にあった「自分がもらったものを少しでも返せる機会」にもつながる語りであり、被災した当事者がこの活動を通して、被災で自分がもらった支援を恩返しすることで得られる満足感・充実感があることがうかがえた。

「大学で学んだことが、現場でより実感できた」という『理論と実践のつながりの実感』が抽出された。これは＜活動前の気持ち・考え＞の『被災地を知る』の中にあった「ゼミで学んだことと実際の被災地の様子を確認したい」という目的とつながり、活動を通して目的を達成できたことがうかがえた。

また今回が2度目の参加となる学生からは、前回の反省を今回の活動に活かし、「被災者の方々は前回よりも明るく楽しそうに」していると『前回の活動との違い』を実感できたようである。前回からの被災者の肯定的な変化を実感できたことは、『活動で得られた満足感・充実感』にもつながったのではないかと考える。

さらに回答者の大半から「次回以降の活動で改善して行きたい」「これからも積極的に参加して行きたい」という『活動の反省と意気込み』が語られた。再度参加してみたい意欲のみならず、支援に行く回数や場所、支援対象者を広げたい思い、さらに被災者の役に立ちたい思いが語られた。また活動を通して経験したことを周囲へ伝えたい思い、自分自身の変化への気づき、そして自己研鑽への意欲も語られ、参加した学生にとって今回も有意義な体験となったことがうかがえた。

前回は初めて被災地を訪れる学生も多く、実際に活動する前に被災地に抱いていたイメージと実際に見てのギャップをふりかえる回答が多かった。今回も『被災地に抱いたイメージと現実』とのギャップを感じた語りもあったが、「目に見えない震災の傷があるのだろうか」という現状からだけでは見えないものをイメージする語り、「4年という時間が流れているが、過去のことではない」という時間は経っていてもまだ終わっていない現実を実感した語りが見られた。また被災地の現状を見て「まだまだ支援の手が行き届いていない」といった『復興への問題意識』も語られた。

また今回の活動を通して、今自分ができる『支援のあり方の再認識』を抱く機会となったようである。その中の「医療人として、人として、もっと被災された方々と関わっていきたい」という語りは、『理論と実践のつながりの実感』での語りの内容も含めて、医療系大学で学ぶ学生ならではの体験の気づきではないかと

考えられた。

３）レジリエンス高低群による内容分析

量的分析でのレジリエンス高低群の分類に従い、自由記述内容における質的な差について検討した。結果、レジリエンスの高低による質的な差は確認できなかった。

４．自己効力感の観点からの検討

ここでは、GSES尺度得点の高低で、１）活動前後の不安・緊張の変化、２）活動後のふりかえりの内容に差異があるかどうかを検討した。高群低群の群分けについては、GSES総得点を算出し、平均値を基準にGSES高群･低群とした。

１）活動前後の不安と緊張の変化

有効回答が得られた18名の回答を対象とした。活動前後の意欲･感情･意志等を確認する7項目の質問のうち、「Q3:被災した方にうまく接することができるか不安だ」、「Q4:現地に行くのは、緊張する」の2項目について、GSES尺度の高群9名―低群9名に分けて比較した結果を表8、9に示す。

GSES高群では、活動前の不安や緊張を感じている者（ややあてはまる、よくあてはまるの合計）はそれぞれ50％となっており、活動後は不安37.5％、緊張62.5％となり、活動後の不安はやや減じたものの、緊張は高まっている。GSES低群では、活動前の不安75％、緊張50％となっており、活動後は不安87.5％、緊張75％となり、GSES高群と比べ不安・緊張ともに活動前から高く、活動後さらに高まっていた。

表 8　GSES 尺度の高群の不安(Q3)・緊張(Q4)の変化

	まったく あてはまらない	%	あまり あてはまらない	%	どちらとも いえない	%	やや あてはまる	%	よく あてはまる	%
活動前										
不安	0	0.0%	3	37.5%	1	12.5%	3	37.5%	1	12.5%
緊張	0	0.0%	2	25.0%	2	25.0%	3	37.5%	1	12.5%
活動後										
不安	1	12.5%	2	25.0%	3	37.5%	2	25.0%	1	12.5%
緊張	0	0.0%	3	37.5%	1	12.5%	4	50.0%	1	12.5%

表 9　GSES 尺度の低群の不安(Q3)・緊張(Q4)の変化

	まったく あてはまらない	%	あまり あてはまらない	%	どちらとも いえない	%	やや あてはまる	%	よく あてはまる	%
活動前										
不安	0	0.0%	1	12.5%	0	0.0%	1	12.5%	5	62.5%
緊張	0	0.0%	2	25.0%	1	12.5%	0	0.0%	4	50.0%
活動後										
不安	0	0.0%	0	0.0%	2	25.0%	3	37.5%	4	50.0%
緊張	0	0.0%	1	12.5%	2	25.0%	4	50.0%	2	25.0%

２）活動後のふりかえりの内容について（質的分析）

活動後のふりかえりについて、活動後に回答を求めた≪ふりかえり２≫と≪ふりかえり３≫に記載された内容を対象に、類似した記述をカテゴリー化した。GSES高群のみから得られたカテゴリーは「*」で、GSES低群のみから得られたカテゴリーは「**」で記す。

GSES高群の回答を分析した結果を表10に示す。≪ふりかえり２≫は『被災された方の前向きな姿勢や感情』、『*被災された方、被災地域への共感』、『被害の大きさの実感』、『*被災された方の居住空間、社会参加の改善

の必要性』、『*今後の活動への意欲』のカテゴリーが得られた。≪ふりかえり３≫は『次の活動についての意欲』、『今後の活動の工夫』、『他の被災者支援活動への意欲』、『医療系大学生としての関心』のカテゴリーに分類された。

表 10　GSES 高群の振り返り内容の分類 *印は GSES 高群に独自のカテゴリー

≪ふりかえり２≫ 感じたことや考えたこと	［被災された方の前向きな姿勢や感情］ ・今回の田老の皆さんの踊りなどをみて、仮設住宅に住みながらも、近所の人とコミュニケーションをとったりしているのだと思った ・田老の方達が休日に体育館などで踊りをやっていると聞いて、思っていたよりも１日１日を元気に過ごしているのだと、改めて感じた。 ・演奏面では、前回の反省を活かして、みんなが知っているような曲を演奏した結果、前回よりも来ているお客さんが楽しめているように感じた ＊［被災された方，被災地域への共感］ ・私や去年から何度か被災地に行っていたが、今回初めて仮設住宅に行った。思ったより、復興が進んでいないと感じた。 ・外観を少し見ただけであったが、狭く単調に並ぶ仮設住宅は、もの寂しげな印象を受けた。たくさんのお店が仮設住宅内で営まれていた。昔、お店を構えていたところが流されたのかと考えると、胸が痛む。 ・まだまだ復興に携わる人手は足りていないということ、精神面での援助も必要であることがわかった ・所々にある津波到達地点の表示に心が痛んだ。 ・地元にあるコミュニティセンターのような温かい場所だった。しかし 4 年も経った今、まだ簡素な仮設住宅で住まなくてはならない被災者の方々の大変さは、私たちが思っている以上のものであると感じた。 ［被害の大きさの実感］ ・初めて仮設住宅をみて、驚きました。自分が想像した以上の数があったのが印象的でした ＊［被災された方の居住空間や社会参加の改善の必要性］ ・仮設については、住民の方が言っていたが、オリンピックに数円億する施設を建てるくらいなら、そのうちの一部を用いて、もう少し QOL が向上する住まいにできないかなと思った ・案外仮設は狭くないと思った。だがやはり衛生面は悪く、寒そうに感じた。 ＊［今後の活動への意欲］ ・このような所・時だからこそ、学生である私たちができる最大限のもてなしで、もっと携わっていきたいと、強く感じました。 ・チラシ配りで訪れたが、ライブには参加することがなかった人が、もし社会参加があまりできていなかったのであれば、今後もライブなどの活動で社会参加を促したい
≪ふりかえり３≫ 被災地への今後の関わり方	［次の活動についての意欲］ ・また演奏会などがあれば参加したい。 ・今後も自分たちの演奏で、被災地の方達を明るく元気づけてあげたい。 ・今回のふれあいライブでは、思ったよりも数多くの人たちが来てくれ、楽しんでもらえたと感じた、またこのような機会があれば是非参加してみたい。 ・もっともっと被災地に行く機会を増やして行きたいと思った。 ・これからもっと被災地域について研究し、次の機会に活かせるように頑張りたい。 ・またこのような機会があれば、関わっていきたい ・今回大盛況で、たくさんの方に喜んでいただけたので、続けていきたい活動だと思った ・フード調理などで間接的なことであっても携わることができたことは本当に嬉しかった。今後もっとこのような活動に携わっていきたい。 ［今後の活動の工夫］ ・演奏だけではなく、楽器についてのクイズなどちょっとしたイベントも取り入れてもいいなと思った。 ［他の被災者支援活動への意欲］ ・言葉では内陸と沿岸の格差について聞いていたが、実際に見てみて、仮設の簡素さなどにショックを受けた。ボランティアでできることは少ないが、今回みたものを

	周りの人に伝えるなど、被災者側以外にも働きかけていきたい。 ［医療系大学生としての関心］ ・今回田老ふれあいライブを開催したが、全ての人が参加できたわけではなく、少し入りづらいと感じている方も、少なからずいらっしゃったと思われる。よって私たちは医療人としてだけではなく、人としてもっとそのような方々と関わっていきたいですし、もっと傾聴を大切にしたいと強く思った。

GSES低群の回答を分析した結果を表11に示す。≪ふりかえり２≫はGSES高群と共通するカテゴリーとして『被災された方の前向きな姿勢や感情』、『被害の大きさの実感』に分類された。低群からのみ得られたカテゴリーは『**自分たちの活動への不安』、『**被災された方の居住空間等への苦労』のカテゴリーであった。≪ふりかえり３≫では、『次の活動についての意欲』、『今後の活動の工夫』、『他の被災者支援活動への意欲』、『医療系大学生としての関心』のカテゴリーに分類され、GSES高群とすべて共通したものとなった。

GSES高群では『被災された方、被災地域への共感』や『被災された方の居住空間、社会参加の改善の必要性』、『今後の活動への意欲』など情緒面での共感や被災された方の生活の改善策や次の活動への意欲まで示していることがわかった。GSES低群では、活動内容への不安、および被災された方の生活の不便さへの認知が、特徴として挙げられる。

表 11　GSES 低群の振り返り内容の分類　**印は GSES 低群に独自のカテゴリー

≪ふりかえり２≫ 感じたことや考えたこと	［被災された方の前向きな姿勢や感情］ ・皆さん元気で笑顔で来て下さって嬉しかった ・自分が居たところと環境や人がどのくらい違うのか、どう接するべきかが少し不安だったが、自分が思っていた程ではなかった。 ・考えていたよりも明るいお客さん達ばかりで、震災の傷は癒えかけているのだろうか。 ・皆さんの顔や雰囲気が明るくなったように感じた ・中には先行きに不安を感じているのか、表情が少し暗い方もいらっしゃったように思うが、以前よりもその割合が減ったように思う。 ・被災地の方々は、とても元気で、笑顔だった。辛いときがあったのに、こんなにも元気でいるところをみて、とてもたくましいなと思った ・仮設住宅は思っていた以上に小さそうだったが、住民の人々は明るく、楽しそうチラシ配りやライブを通していろいろな人と話をすることができたが、震災のショックをまだ抱えていると感じられる人に会い、4 年という時間が流れているが、過去のことではないということを改めて感じた。 **［自分たちの活動への不安］ ・思った以上に高齢者の方が多く、自分たちの演奏する曲を知っているか不安になった。もっと演歌や歌謡曲のレパートリーを増やしたい。 ［被害の大きさの実感］ ・行き帰りのバスの中で見た、広い土地の中に住居が点々としかないところを見て、津波がいかに恐ろしいかを知ることができた。 **［被災された方の居住空間等の苦労］ ・場所によって環境（仮設住宅の規模、近くに店があるか、サポートがどれだけ充実しているか）が違うと感じた（環境の差が大きい）。 ・春に田老のボランティア（ワカメを袋詰めする作業）に行ったところから、仮設団地は結構距離があったので、負担になりそうだと思った。 ・震災から 4 年以上たった今でも仮設住宅に暮らされていて、まだまだ支援の手が行き届いていないと感じた。 ・大きな病院が近くにないため、盛岡までバスを乗り継いで行かなければならないと聞き、特に高齢者の方や小さい子どものいる方にとっては、時間的にも、体力的にも厳しいと考えられるので、なにか策があればよいと思った。サポートセンターやお店までの距離が住宅から少し遠いのが気になった

≪ふりかえり３≫ 被災地への今後の関わり方	**［次の活動についての意欲］** ・自分の得意な演奏を通して、たくさんの人の力になりたいと思った ・演歌、歌謡曲のレパートリーを増やして、再び田老に挑みたい。 ・私にできる音楽という形で、田老のみなさんを応援して行けると思いました ・これからもふれあいライブのような活動をおこなってみたい ・今後も、このような活動があったら参加してみたい ・自分のやった仕事にやりがいを感じた。機会があればまた参加してみたい **［今後の活動の工夫］** ・ダンス（体操）を取り入れたら、体もほぐれて、気分が楽しくなるのでは。 ・景品は入浴剤よりも抹茶入りのお茶やようかんが喜ばれた **［他の被災者支援活動への意欲］** ・どのくらいの人数かわからないけれど、仮設の子ども達と何かしてみたい。もう少し回数を増やして欲しい ・被災地の方々に、もっと笑顔になっていただけるような手助けがしたい 今後も被災地ボランティアに積極的に参加したい **［医療系大学生としての関心］** ・仮設住宅の地域の中に歯科医院があるのを見て、このような医療の提供の仕方もあるのだなと感じた

Ⅴ．考察

2015年12月の、被災地支援活動としての第2回田老ふれあいライブの内容と、参加を通した学生の体験について、報告した。

和井田他（2013）は、被災地支援に学生が参加する際の設定の仕方として、学生のレジリエンスを高め、学生の傷つきを防ぐために①大学教員の引率や事前学習の実施によるサポート感がある体制作り、②体験を語り合う場の設定による感情のコントロール感の強化、③仲間同士や支援先との関係作りを強める（孤立感の軽減をはかる）、④学生の自主性を尊重すること（無力感の軽減をはかる）、⑤活動の意味づけ等で、支援の実感を持ちやすくする（無力感の軽減をはかる）ことをあげている。今回の活動においては、事前レクチャーやミーティング、ゼミでの作業、そして前回活動した部員からの情報提供など、事前の情報と準備への配慮がされていたといえる。また、学内の複数の団体との協力によりイベントを実行したこと等により、学生間のネットワーク形成がなされた。また準備には学生の自主性を尊重したこと、事前事後のアンケートにより、活動の意味づけをおこなったことから、支援活動関与の設定の仕方としては、概ね妥当だったことがいえる。

しかしながら、学生が相互に意見を交流し、体験を語り合う場の設定は、今回できなかった。災害にまつわる思いについては、支援者の立場の場合に特に、語りにくくなることがある（藤、2009）。また災害が生じさせる罪悪感ゆえに語りにくくなることもあり、小谷（2014）は、大災害時の自責や経験の言語化の回避、相互理解の欠落が罪悪感を強め、心理的な孤立が深まることを指摘している。安全なグループの中でお互いの思いを語ることは、自身の気持ちを語りおろすだけではなく、聴く—語るという相互のプロセスの中で、新たな力を得、今後のありようを見通す体験（田原他、2015）となる。体験を語れる場の設定を、今後の課題として認識したい。

次に学生にとっての今回の活動への参加と体験を検討する。被災学生にとって「田老ふれあいライブ」を通した被災地へのかかわりは、役に立ちたい･支援したいという『貢献したい思い』や『被災地の現状を知る』という動機、そして自分の何かが変わるかもしれないとの『自己変容の期待』を抱きながらの参加であった。同時に『被災地への気遣い』と、自身の被災体験からくる『当事者意識』も、活動参加に至る大きな理由となったことがうかがえた。多田内・重永（2012）による短期大学学生への調査では、ボランティア活動の動

機・目的については「利己性・自己啓発性」（自分にとって良い経験になる、興味を持ったから）が大きいが、実際に活動をすることで「利他性」（人に感謝される喜びを感じた）の自覚が獲得されることを指摘している。このように最初の動機として、自己啓発的な目的や好奇心等が挙げられることは、大学生として自然なことであろう。

支援活動に参加した後の学生の回答からは『活動で得られた満足感・充実感』が高揚感を伴って報告された。また『理論と実践のつながりの実感』や『前回の活動との違い』など、自身のこの関わり自体を客観的に検証しようとする姿勢も確認できた。そして練習・準備の成果や参加者の様子等から『活動の反省と意気込み』を得て、次の活動への意欲を強めたことも見て取れた。このことには『被災地に抱いたイメージと現実』という、報道等から見聞きする内容と現実とのギャップを鮮明に感じたことも、一因となっていることがうかがえた。さらには学生の立場でできることを改めて考察し、被災地域への医療的かかわりの多様さの発見など『支援のあり方を再認識』し、『復興への問題意識』を強めるに至ったといえる。これらより、学生達が活動前に目的としていたこと以上に、大きな学びを得た体験となったことがわかる。茶屋道・筒井（2012）はボランティアに参加した学生の語りのふりかえりから、支援活動の参加は、事象の背景をとらえること、気遣い・気懸かりをもつこと、生活の再構築に対する気づきを得ること等、対人援助職の基盤となる重要な要素への教育的効果があると主張している。また筆者らの前報告（藤澤他,2015）では、臨床心理学の非医療モデルでのアプローチにふれることは、被災者の生活面・心理面・社会面でのwell-beingへの視点の獲得と、目の前の人を尊重し理解したいという、全人的医療を実現するための基礎となる態度を涵養する効果が見出されたことを報告している。

続いて、レジリエンスと外傷性成長について考える。前報においては「心の弾力性」としてのレジリエンスを取り上げ、その強さに応じた成長の有り様の違いがあるのではないか、そして被災地支援という体験後の変化を「外傷性成長」ととらえると、レジリエンスの高い人においては外傷性成長がみられるのではないかとの仮説をたてた。今回の検討では、レジリエンスの高低による体験の質の差は見出せなかった。これについては、データ数が不足している点がまず挙げられる。そして外傷性成長概念と照らし合わせれば、今回の支援活動は学生にとって「人生を揺るがすほどの出来事」や「外傷体験」には該当せず、被災者の方との交流は短時間のものだったため、先行する出来事（イベント参加）で生じた変化を外傷性成長としてとらえるのは妥当ではないことが理由と考えられた。しかし、外傷性成長は出来事からどのくらいの期間を経過し達成されるかについては、議論がある。この点については、引き続き検討を進めていきたい。

次いで、自己効力感の観点から考える。自己効力感が低い学生においては、活動前に感じた不安や緊張は当然高く、活動後、それらはさらに高まっていた。その一方で、ふりかえりの中で今後の参加に対する意欲や工夫などを前向きに述べていることが多かった。そのため、事前に不安や緊張を取り除くような工夫ができたほうが、行動変容につながりやすくなると考えられ、次回活動にあたって工夫をしたい点である。またふりかえり内容の分析によると、自己効力感が高い学生においては、活動への工夫や意欲がより多く記載され、生活環境の改善の方法にまで踏み込んで記載していることがわかる。一方、自己効力感の低い学生は、活動内容への不安などを感じながらも、工夫や意欲について記載している。自己効力感の高低でみた両群の比較については、データ数が少ないこと、所属団体や被災時の居所などの要因、活動後の一時的な高揚感などの影響が考えられるため、今回の結果のみから明確な相違点をあげることは困難である。そのため、活動への期待度・重要度とその理由など、認知的な要因を盛り込んだ質問項目の設定とその検証が必要となろう。今回の支援活動を自己効力感の観点から検討したが、どのような要因がどのような機序で影響を及ぼしたのか

までの詳細な検討は、現時点では難しい。自己効力感が個人の確信や予期に関する認知であることを考えれば、自己効力感の個人差に合わせた行動変容・行動参画のありようが重要であると考える。これは、自己効力感の変化に関するより精緻なプロセス研究が求められるとの指摘（西村他，2012）とも重なるものであり、今後の課題としたい。

今回の被災地での活動は、将来の医療を担う「誠の人間」としての素地を養う機会として、学生にとって意義深い体験となったことがうかがえた。今後も、体験を通した学びがより効果的に深まるための工夫を加えながら、被災地への関わりを学生とともに継続したい。

謝辞

本学学生がイベントに関与するにあたり、社会福祉法人田老和心会田老サポートセンター様、岩手県臨床心理士会宮古支援チームには多大なるご理解ご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。また学生を受け入れて下さったグリーンピア三陸みやこ仮設住宅住民の皆様に心より御礼申し上げます。

引用文献

相澤文恵，藤澤美穂，平林香織　2015　アカデミック・リテラシーの教育効果の検討—アンケート調査結果からの考察—．岩手医科大学教養教育研究年報．50，67-79.

バンデューラ,A.（重久剛訳）　1985　自己効力（セルフエフィカシー）の探求．祐宗省三他編　『社会的学習理論の新展開』　金子書房，103-141.

茶屋道拓哉，筒井睦　2012　東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義．九州看護福祉大学紀要，12(1)，25-37.

藤澤（川口）美穂，山口浩　2012　東日本大震災のアウトリーチ支援におけるリラクセーションの実践．現代行動科学会誌，28，18-29.

藤澤美穂　2013　岩手県沿岸部の仮設住宅コミュニティ支援と，支援チームというグループ．集団精神療法，29(1)，54-60.

藤澤美穂，氏家真梨子，畠山秀樹　2015 医療系大学生の被災地での臨床心理学的地域援助体験．岩手医科大学教養教育研究年報．50，53-66.

藤信子　2009　災害支援者のためのグループ．臨床心理学，9(6), 735-739.

古川壽亮，大野裕，宇田英典，中根允文　2003　一般人口中の精神疾患の簡便なスクリーニングに関する研究．平成14年度厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学特別研究事業)心の健康問題と対策基盤の実態に関する研究 研究協力報告書.

平野真理　2010　レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み－二次元レジリエンス要因尺度（BRS）の作成．パーソナリティ研究，19(2)，94-106.

平野真理　2015『レジリエンスは身につけられるか—個人差に応じた心のサポートのために』　東京大学出版会.

岩手県臨床心理士会　2015　東日本大震災に関する支援活動報告書(平成26年4月～平成27年3月).

岩手県臨床心理士会　2016　東日本大震災に関する支援活動報告書(平成27年4月～平成28年3月).

小谷英文　2014　『集団精神療法の進歩—引きこもりからトップリーダーまで—』　金剛出版.

Kessler, R. C., Andrews, G., Colpe, L. J., Hiripi, E., Mroczek, D. K., Normand, S. L., Walters, E. E., & Zaslavsky, A. M. 2002 Short screening scales to monitor population prevalences and trends in non-specific psychological distress. Psychological Medicine ,32,959-976.

西村薫，野村亮太，丸野俊一　2012　自己効力感に関する研究の展望と今後の課題—展望的自己効力感の提唱—．九州大学心理学研究，13,1-9.

坂野雄二，東條光彦　1986　一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み．行動療法研究，12(1)，73-82.

坂野雄二，東條光彦，福井至，小松智賀　2006　GSES General Self-Efficacy Scale.　こころネット株式会社.

田原明夫, 高林健示, 西川昌弘, 藤信子, 安部康代, 長友敦子, 針生江美, 藤澤美穂　2015　東日本大震災関係者の相互支援グループⅦ—経過と展望－．集団精神療法，31（1）,67-73.

多田内幸子，重永茂　2012　東日本大震災後の幼児教育学科学生のボランティア活動に対する意識の変化．久留米信愛女学院短期大学研究紀要，35,67-81.

Tedeschi.R.G.& Calhoun,L.G. 1996 The Posttraumatic Growth Inventory : Measuring the positive legacy of trauma. Journal of Traumatic Stress,9,455-471.

和井田節子，田中卓也，小林田鶴子，小泉晋一　2013　被災地支援ボランティア活動が教職志望の大学生に与える教育的意味―石巻市内の小学校における支援活動を通して―．共栄大学研究論集，11,251-272.